

ふるさとの鼓動
北に生きる心
むすんで

こぶし

第 136 号

2012年 8月10日発行

発行責任者：横井正人

編集：機関紙局

特定非営利活動法人 民族歌舞団こぶし座

北海道函館市陣川町 122-172

TEL:0138-54-2859 FAX:0138-84-8207

年 2 回発行

E-mail:kobusiza@wing.ocn.ne.jp

http://www18.ocn.ne.jp/~kobusiza/

主な内容

- (1) 第 14 回通常総会の報告
- (2) 一般公演について(寄稿)
- (3) 寄稿…地域に寄せる思い
- (4) まなぶ



暑中お見舞い 申し上げます。

みなさま、いかがお過ごしでしょうか？
震災後の原発事故により、今なお復興の足どりが滞る状況のもと、生活再建に向け奮闘する多くの方々にご心よりお見舞い申し上げます。

私たち「こぶし座」も、被災地のみなさんと心を結び合いながら、「東北へのエールと北海道の元氣」を生み出す公演活動を昨年同様、継続して行きたいと考えております。

さて、この夏の全国的な猛暑は衰える兆しがなく、熱中症にかかる人も急増しているようです。私たちの住む函館も、先月末には32度の真夏日を記録したほどで、体調管理に気を配りながらの活動となっています。

今年も地元恒例の、陣川あさひ町会「納涼まつり」が行われました。一週間も前から櫓が組まれ、舞台が作られ、町会役員総出の手作りの祭り会場。提灯に灯がともり、準備万端。

小学生たちの打ち始めの太鼓と「寄せ太鼓」、中学生たちからの希望によって発表することとなった「ぶち合わせ太鼓」の演奏。子どもたちと共に続けてきた「太鼓教室」が、地域のなかで芽吹きだし、花を咲かせ、住民に喜びを与えてくれます。継続することの大切さ、素晴らしさを、子どもたちの真剣なまなざしと汗に、またひとつ教えられました。

暑い日が続きます。どうぞ、お元気で!!

第14回・「通常総会」開かれる。

公演を通じて東北と北海道の心を繋ぎ、

「被災地へのエールと北海道の元氣」を

創りあげよう…!

さる、四月二十九日(日)

第三号議案「二〇一二年

「第十四回通常総会」が行われ、社員総数十八名、出席者十三名。横井理事長の挨拶の後、開会となりました。

事業計画」では、「被災地へのエールと北海道の元氣」を創り出していく為の一般公演や、三年後に迎える創立五十周年の節目に向けたこれからの座の新しい創造活動について話されました。

第一号議案「二〇一一年度事業報告」では、百三十五回(二四、八三三人)の公演・講座などの活動について、震災復興支援公演として取り組まれた後援会主催の函館公演や昨年度と同様に、振興局(5カ所)の助成事業として実施した14地域での一般公演、函館市アウトリーチ事業で引き続き講師を任されたこと等が報告されました。

第四号議案「二〇一二年

度 収支決算報告」では、大幅な公演収入減という状況の中、昨年以上に運営費の削減に努め、基金の返済期日の延期等をお願いしながら経営を維持し、建築物の継続的な修繕事業も何とか実施できたことが報告されました。

第五号議案「役員

の再任の提案があり、承認後の新理事会で横井正人が引き続き理事長に互選された旨の報告があり、全議案が承認され審議を終了しました。

尚、座の創立・発展の為に退座後も尽力してくれた、前代表の国田修司氏は、家庭都合などにより本総会をもって脱退致しました。

『復興支援の連帯の輪を広げて…東北と北海道の心繋ぐ…』

前年度の二〜三月にかけて9市町村(地域)において、11回の一般公演を実施しました。

どの会場でも、東北の演目を柱に据えた内容は、被災地への思いを共有させ連帯し行動する心を繋ぐために、大いに役割を果たすものとなりました。

改めて、民族芸能が持つ力に、私たち自身が励まされる日々でした。

取り組み成功のために奮闘し、絆を紡ぎ出して下さった各地の実行委員会の方々に、心から感謝しております。

三月下旬、お二人から嬉しい手紙が届きました。

札幌市中央区地域公演の実行委員会代表・菊地俊之さんと、当別公演の当別こぶし座を観る会代表・鈴木岩夫さんからです。

両地域の公演の当日パンフレットをご紹介します。

〈別刷り折り込み版です〉



今年度は、六月から鹿部町・札幌市藤野・北広島市での一般公演、七月に入り学校公演、太鼓講座、保間研例会など様々な活動が展開されてきました。



六月二十四日に行われた札幌市藤野地域公演の様子と、九月十一日に公演を予定している土別公演への期待を寄稿していただきましたので紹介します。

「米づくりへの思い」

土別公演実行委員

安川登志男

(土別市教育長)

二〇〇五年三月八日の吹雪の土別公演から7年が経過した。

あの時、こぶし座の皆さんをお迎えするメッセージに「土別市は一時は、農業人口の割合が全国一高い市、米の出荷量が全国一多いまちとして知られておりました。しかし、農業情勢の悪化を背景として、経済活動の停滞と人口の流出が続き、市民の心は疲弊しています。(中略)みなさんの舞台に触れることで、市民に農業復興と地域再生へのエネルギーが漲ってくることを願っています。」と書き記した。

果たして状況は好転したか？否。

農業者の離農は相次ぎ、地域活動もままならない限界集落が増え、人口減少にはいつ

こうに歯止めがかからない。そして、T P Pの問題が、農業都市土別に大きく影を落とそうとしている。

* *

一九八四年から、私は市内の文化団体と語らって、明治の開拓から第二次大戦の終戦までのまちの歴史を、演劇や音楽や舞踊を交えて表現する市民手づくり創作構成舞台『恵水賦』の取り組みに着手し、6回の公演を行ったが、創作の過程で先人の強い思いに出会った。

不安に苛まれながら、しばれのために木が割れるほどの酷寒の地に入植した先人は、筆舌に尽くし難い辛苦の末、原始林を切り拓き、まずは、やせた土地にも耐えられるというソバを蒔いた。

やがて、菜種や豆、そして馬鈴薯の栽培と澱粉生産で、一時は土別商人が澱粉相場を動かすほどの興隆期もあった。

しかし、この地に入植した



「豊年こいこい」より(田植え)

によりも父祖の汗を埋めた大地に花を咲かせて稔らせるものがある。川のど真ん中に杭を打ちしがらみを組んだ土嚢を積んで用水路を切り開き、畦を築いた田んぼに満々と水を張る。北浙二千年民族の悲願のこの大地に花を咲かせて稔らせるものがある。

* *

客土や温床、品種改良で、一時は酒米も作られた。ようやく食べられるような米が作られるようになった時、減反政策をはじめた。そして、おいしい米が作れるようになった今、T P Pが影を落とそうとしている。

この北の大地を切り拓き、耕した先人たちが夢見ていたのは、こんな未来ではない。豊かに広がる農地を基盤にして、三世代四世代が同居し、しっかりと引き継がれていく安定した農業、そして商工業。

医療に対する不安もなく、文化の香り高い郷土、そんなまちの実現を夢見ていたに違いない。

人が人らしく生きられる社会の到来を希求している。

9月11日のこぶし座の舞台が、静かな力で私たちの荒みかけた心を、もう一度耕してくれることを信じている。

「地域が主人公で取り組んだこぶし座公演」

藤野舞踊団 田島千代子

六月二十四日(日)晴天・緑いっぱい囲まれた藤野地区センター。公演が終わり出て来た人たちの顔を見て、取り組んで「良かった！」と久しぶりに満足感でいっぱいでした。募金もたくさんいただきました。

近くの介護施設からサポーターに引率されて来た参加者といっしょの車椅子のおじさんは笑顔いっぱい！

ポケットから、ハンドバックの中を探し、お母さんにおだっこ、と各々精いっぱい募金を寄せて下さいました。

こぶし座の取り組みは二十数年ぶり。最初の仲間達の生活も変わりました。想いはあってもずーとためらいがありました。

今回、こぶし座の横井さんに背中を押される格好でスタートしました。もう一つ地域に永く住んで最近退職された飛田さんがお忙しい中、応援団長を引き受けて下さり、多くの場面で頼もしく、心強い力になって下さいました。

藤野地域には、自然・文化・芸術を愛する人が多く住んでおります。うなぎの寝床と言われる程、国道二三〇号線と豊平川源流に沿って山と(渓谷も)温泉があり(定山溪・こがね湯)、山あいの果樹を中心にした農業、ワイナリーも最近二カ所できました(藤野ワイナリー・八剣山ワイナリー)。小鳥の村で有名な藤野沢小学校(今、熊騒動で学習中)、札幌郊外に残された貴重な水田など、大切にしたい風景があります。



「豊年こいこい」より(脱穀)

此の度の公演は、お米ができるまでの農作業を中心にして、家族の労働・地域の助け合い・人とのつながり、自然(季節)と共に・失われつつある大切なものをおもしろおかしく、リズムカルに演じられておりました。除草機の扱い・脱穀作業は圧巻でした。

会場いっぱい共感と笑いが響きました。更に今の農業を取りまく大変な状況(T P P

なども報告されました。公演成功のために、横井さん、飛田さんとおたずねした学校、保育園。地域の方もたくさんたずねました。

水田を含め農業を営む連合町内会長の高さん、同じく藤野太鼓保存会の松川さん、地区センター踊りの会、南区の農業を守る会(瀬戸さん、八剣山園の桜井さん)等々、

連合町内会の回覧板に、こぶし座公演のチラシを初めて載せていただきました。そんなことも良かったのかと思いま

す。当日どんなことになるやらと不安と期待でいっぱいでした。

私たちが暮らす地域にある「陣川あさひ町会」にはいつも様々な形でお世話になって

います。子どもたちとの太鼓が出会いとなった町会役員の方に、この地域に寄せる思いを寄稿していただきました。

「陣川町に住んで」

上野山隆一

『わたくし、生まれも育ちも、葛飾柴又です』お正月映画の聞きなれたこのせりふ。ふうてんの寅さんがある日ひよつこりと生まれ故郷に帰ると、そこには懐かしい人たちがいて寅さんにちよつとだけ

気が遣い、温かく迎えてくれるふるりの顔がありました。

たが、地域で見かけた顔がたくさんありました！近くの介護施設の方がたくさんやって来て楽しんでくれたこと。

こぶし座の真骨頂『伝統芸能を守り伝え、地域の文化と人のつながりを大切に、生きる喜び、働く誇り、明日への夢を織り込んで』が生きた公演だったと思います。



公演会場での一コマ(手遊び交流)

この年齢になり、又一つ私の大切な「思い出」が増えました。そしてもう一つ、当日、終日応援団として「夫」が力を発揮してくれたことです。

めて下さった仲間と心寄せ下さった多くの皆さんに心より感謝致します。

子どもの頃から寅さんの「男はつらいよ」が大好きで、たのしみに見ておりました。私は、生まれが岩見沢です。父の仕事の関係で北海道の主な市を2年から6年くらいの間で転勤しておりました。もちろん家族みんなで引越して、小学校や中学校のときなどは出会いや別れがその都度やってきますので、気持ちがついていけなくなる時もありましたし、親も大変だった

と思います。このような転校や転校の多い人たちは他にも沢山いらっしやると思いますが、ですから、何かあったら帰れる所「地元・故郷・ふるさと」にとっても憧れやうらやましさがありません。ですから「男はつらいよ」を見ていると心がとてもあたたかくなるのです。

只今、我が家は、妻一人子一人で10年前より陣川町にお世話になっております。7年前より町会の青少年育成部長を担当させて頂いております。仕事と町会の両立は大変ですが、これから長い年月を陣川町と地域の方々と共に住んでいくのですから少しでも町が良くなり住みやすくなればと思自分の出来る範囲でお手伝いをしております。

今から6年前、町内にある民族歌舞団こぶし座さんの横井理事長が会館に來られ、陣川町に座を構えて10年を期に「何か陣川町にお返しが出来ないか」と申し出ていただきました。町会役員一同大変感激し、横井理事長の考えで地域の子どもを対象に夏休みや冬休みを利用して町会館で太鼓教室をスタートすることになりました。最初のとき7名ほどの人数も現在30名の申し込みが有り中学2年生、1年生の先輩たちが小学生に指導をできるほどに成長しました。

- 【公演の計画】(予定含む)
- 「一般公演」
 - 9月11日(火) 土別市
 - 10月21日(日) 南幌町
 - 11月24日(土) 旭川市東鷹栖
 - 25日(日) 深川市
 - 28日(水) 富良野市
 - 29日(木) 旭川市神居
 - 12月01日(土) 旭川市永山
 - 04日(火) 鷹栖町
 - 06日(木) 枝幸町
 - 09日(日) 紋別市
 - 「学校公演」
 - 8月28日(火) 釧路・鳥取西小
 - 9月18日(火) 皂・緑丘小
 - 20日(木) 北見・常呂町
 - 21日(金) 北見・北小
 - 27日(木) 札幌・手稲宮丘小
 - 11月12日(月) 釧路・北昭和小
 - 「保育園・幼稚園公演」
 - 10月02日(火) 札幌・菊水上町保
 - 05日(金) 函館・人見保
 - 11月21日(水) 札幌・北の星
 - 12月11日(火) 釧路・興部幼



陣川ばやしをサポートする上野山さん

まなぶ

出会いと
つながりを求めて

地元、函館・道南の歴史を学び、
豊かな創造につなげようと

取材活動を展開しています。

蠣崎波響「夷酋列像」
松前町特別公開に
参加して
創演部 計良正子

「夷酋列像」は松前藩家老の蠣崎波響が、一七八九年に起きたアイヌ民族の蜂起「クナシリ・メナシの戦い」で、戦いの収束に協力した長老らを描いた肖像画。フランス・プザンソンの美術館から初めて松前町に「里帰り」して、七月二十三日松前城資料館で特別公開された。

七月上旬、「蝦夷地支配の象徴・松前城でカムイノミ」北海道新聞の見出しが目に飛び込んできた。
特別公開実行委員会からの「先人に対する鎮魂の祈りをささげてほしい」との要請に、アイヌ協会函館支部の加藤支部長が快諾し、同協会本部(札幌)の後援を得て実施とある。「夷酋列像」の背景には松前藩によるアイヌ民族抑圧の歴史があり、「アイヌ民族と和

人のわだかまりを乗り越え、互いに理解し合うための歴史的な一歩になる」と強調する支部長の言葉が深く胸に響いてきた。

函館を出る時にはどんよりとした雲り空が、松前町に着く頃には見事に晴れ上がり真夏の陽差しに変わっていた。

オープンセレモニーの後、特別公開と同時に、いよいよ天守閣前広場で「カムイノミ」：神への祈り：がはじまった。

美しい民族衣装に身を包んだアイヌ協会函館支部と道内のアイヌ文化伝承者の方々、地元松前町役員とが炉を囲み、司祭の指示でカムイノミが厳かに進められていく。

トウキに注がれたお酒をイクパスイで炉に垂らしイナウに捧げ、アイヌ語での祈りが優しく静かに響いてくる。

途中、観客として参加している私たちの側にもお酒の入ったトウキが廻ってきて、神妙な面持ちでお酒を口に含み

隣の方へ渡すと、回し飲みのような形となり笑顔がこぼれ、場が和んだ。

最後に火を炊きイナウや供物を焼くなどして神への祈りを捧げた。

すべての所作に、イヤイライケレ：感謝の気持ちを持ってあたるのです：司祭の言葉が心に染みわた。

炎天下のなか、両民族の祖先を慰霊し平和を祈願してくださったアイヌ民族の深い共生の思想に胸打たれ、感謝の気持ちでいっぱいになる。

実はこの日、驚きの出会いがありました。

千歳アイヌ文化伝承保存会会長の石辺勝行さんを始めカムイノミの司祭を務めた野本さんと会員の方々がいらしていたからです。千歳アイヌ文化伝承保存会には、前会長の中本ムツ子さん(故人)を通して

て取材に伺い歌や踊りを教えて頂いた経緯があり、今もアイヌ語教室でお世話になっているのです。

会長さんにご挨拶をして、カムイノミの感動と感謝を伝えると、「いやあーここで会えるなんて、何か運命的なものを感じてしまっね：」優しい笑顔が返ってきました。

「よかったわね：」どこからかムツ子さんの声が聞こえたような気がしました。

誇り高き民族の復権と未来につながる共生を願い続けたムツ子さんが、引き会わせてくれたのかも知れません。

：イヤイライケレ：

夷酋列像を鑑賞しようと天守閣内に入ると、地元の小学生の集団が列をなしていた。その最後尾に付き、先生と子ども達の楽しそうな会話を聞きながら長い順番を待った。

予想していたより小さな十枚の夷酋列像は、不思議なまなざしで迫ってきた。

：夷酋列像は扉です。これを開くと、アイヌ民族と和人の悲しい歴史や、松前藩の政治、ロシアや中国との関係、破鏡の人生が見えてくる。どの扉を開け、何を見たいかは人によって違います。それが絵の面白さなのです。：道立近代美術館学芸員の話が甦っ

てきた。一緒に列をなし順番を待った子ども達は、どんな扉を開くのだろうか。

そして、歴史的カムイノミに立ち会った大人の私たちは、どの扉を開き、何を見つめ、今を生きるべきなのだろうか。

*

【用語解説】

・イナウ：儀礼用具のひとつで、ヤナギ、ミズキなどの木に切り込みや削りかけをつけたもの。送りなどの儀礼の際、神への贈り物として必ず祭壇に供えられる。また、神と人間の仲介役を担ったり、それ自体が神となったりする。

・イクパスイ：儀礼用具のひとつで、酒を神に捧げるときに使う木べら。人間の言葉の足りない部分を補い、誤りを訂正し、雄弁に神に祈りを伝えてくれるといわれる。美しい彫りが施されている。

・トウキ：儀礼用具のひとつで、漆塗りの天目台と椀の組み合わせで一客とし、神に捧げる酒を注ぐ。正式には、漆塗りの膳にトウキを四客置き、それぞれにイクパスイをのせる。和人との交易などで入手したもの。(先住民アイヌ民族より アイヌ語監修・中川裕)

※7/25〜9/9

道立函館美術館にて
特別展示が行われている

旅 の スケッチ 再会 編

先月、釧路の学校公演からの帰路、十勝管内の浦幌町で途中休憩。その時、ふと気がつくど公演車に近づいてくる見覚えのある顔。「：ン!!」なんと、2月の浦幌公演の実行委員長・差間さんだった。アイヌ民族で、町議としても奮闘している。優しい人柄にふれながらのしばしのおしゃべりで、それからの運転が不思議と穏やかになった。



往来激しい浦幌の国道脇で「ホッ…癒」

《編集後記》

変わらぬ猛暑続きー。

反原発の国民的なうねりも猛烈な熱さを帯び、官邸包囲網が変わらず続く。

国民を無視する、あの方も変わらない。根っからの熱中性(症?)なのだろう。この際、頭を冷やすことから初めてみてはどうだろうか。(徹)